
幻夢抄録 目覚め 4章；休息

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録　目覚め　4章・休憩

【Zコード】

Z0798A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

やつとの事で、砂漠を越えた二人は、岳山おかさんという街にたち寄った。街の活気にはしゃぐ氷魚、しかし、予期せぬハプニングが！？異界が舞台の、壮大スペクタクル。

始めは、固くとげとげしかつた氷魚も、今では、すっかりうち解け、
気安くなつた。

瑪瑙も、少なからず、彼女に興味を持つていた。

「つくしゅん！」

夜の静寂を、氷魚のくしゃみが破つた。

「なんだ、風邪か？」

干し肉を、噛みきつてから、瑪瑙が聞く。

「そうかも知れない…」

「大丈夫か、熱は、ないか？」

「ん、熱は、ないと思つ」

額に手を触れて、笑つてみせる氷魚。

「俺の、貸してやるよ…少しば、暖まるだろ？」

「ありがと、あつたか～い…でも、あんたが風邪ひいちゃう」

「平氣だ、これくらい」

「ふーん…」

二人の間に、しばしの静寂が流れる。

「氷魚」

背後で、瑪瑙が呼んだ。

「なに？」

「その…あのな、くそつー何て言えばいいか分かんねえつ」

「ちよつ、ちよつと瑪瑙！？あんたこそ、熱あるんじやないつ、力

才真つ赤よ？！」

「大丈夫だ…」

次の瞬間、氷魚は、背中に温もりを感じて、身を固くした。

「めの、う？」

「ううすれば、もつと暖かいぞ」

瑪瑙は、氷魚の背中を、抱き締めていた。

氷魚は、思った。まさに、熱が出てしまってそう、とはこの事だ。
もの凄く、顔が、熱く感じるのはなぜだらうか？

「ちがう、違うんだよ…そんなことが、言いたいんじゃねえ、俺さ、

氷魚が、好きだ」

「瑪瑙…」

氷魚は、ふと異界　人間界で、過ごした日々を、思い出していた。
それが、なぜか、随分昔のことのように思えて、可笑しかった。
(そう言えば…向こうで、こんな気持ちになつたことなんて、あつ
たつける？)

「お前をえよければ、このままでいてやるよ」

「うん、ねえ、瑪瑙…あたしの兄さんって、どんなヒトだったの?
「ん~…そうだな、お人好しで、まじめで、俺と違つて…器量よし
かな」

「前にも言つたけどさ、あんたも、充分男前だよ」

言つた、氷魚の顔は赤い。

「そう、なのか？」

「まあね、あたしの周りに、瑪瑙みたいな人、いなかつたし」

そう言つて、氷魚は、目を閉じた。

「どうした、眠いのか？」

「瑪瑙…暖かくて、すこく落ちつくな。心臓の音が、一つに溶けたみ
たいで」

その時、薄水色の地平に、一条の光が走る、夜明けだ。

また、一日が始まる、砂漠越えの、厳しい旅が。

「さあて、そろそろ動きだすかあ」

瑪瑙は、氷魚の背中から離れると、縦に伸びをした。

「ありがと、瑪瑙。これ、返すね」

氷魚は、瑪瑙に外套を手渡す。

「氷魚」

「なに…」

呼ばれて、振り向いた氷魚は、引き寄せられると同時に、唇に、温

かい感触を感じて田を見開いた。

瑪瑙の顔が、すぐ田の前にある。脣を、奪われたのだ。

「なつ、め、瑪瑙…？苦しいって…」

突然のことに、氷魚は、田を白黒させた。

「…りたい、氷魚、お前を守りたい」

「え…」

『守つてやる』ではなく、『守りたい』

「ありがと、なんか、恥ずかしいけど…嬉しい」

「なあ、もう一回していい？」

「やつ、やだつ、なに言いだすのよ…」

氷魚は、瑪瑙を突き飛ばす。

「つてえなあ、ま…いつか。一回できたし」

「もうつ、調子に乗ンなつ…」

「氷魚」

「なによ…また何かする気？」

「ちーがうつて！あれつ、あれ見てみろよ！」

瑪瑙は、そう遠くない地面を、指さしていた。

「な、なに、あそこ…色が違うつ、砂漠が切れてるんだわ！」

「行くぞつ氷魚！」

「うんつ」

二人は、走り出す、砂漠を抜けて踏んだ地面には、苔と、丈の短い、下草が生えていた。

「防風林、みてえだな」

「うん…足元が、ふかふかしてるう」

進むにつれ、細かつた道は太く、整備されたものに変わった。

「車輪の跡…ヒトが住んでるの？」

氷魚は、屈んで、轍わだちの土のかけらをつまんだ。

「いや、衙まちがあるんだ。行こうぜ？こーがどこだか、確かめないと」

「あ、瑪瑙つてば…まつてよー」

足早に歩きながら、氷魚は、瑪瑙に話しかける。

「ねえ、この衙から、瑪瑙の村までつて、どのくらいなの？」

「そうだな、この呂山から、歩いて一日だ」

「呂山…変わった名前ねえ」

今、一人は、衙の大通りに立っている。氷魚は、周りを見まわしながら言つた。

衙は、どちらかといふと中華風で、去年、友人と行つた、中華街を思つせた。

「すごいのね、いろんな店が並んでる…なんか、お祭りみたい」

楽しそうに言う氷魚に、瑪瑙は、片眉を上げた。

「ん、じゃあ見ていくか？」

「ほんと!？」

「ま…いつまでも、そんな格好じや、過ごしにくいだろ？夜は特に」「え…そういうえば、そうだつた氣もする、けど…もう慣れちゃつた

から、忘れてたわ」

（へえ…結構、細かいトコ見てたんだ）

「ここんとこ、ずっと厳しかつたからな、息抜きだ」

言い終えたとき、隣にいたはずの、氷魚が、どこかに消えていた。

「氷魚ッ！？つたく、なんか大人しいと思つたら！」

瑪瑙は、人群れを縫うように進み、走り出した。

その頃、氷魚は、人波に流されるまま、進まされ、やつとの事で、流れから抜け出せたはいいが、瑪瑙と、はぐれてしまつていた。

「マズイ、これつて…迷子つてヤツ？」

そのとおりだ。相変わらず、人通りは激しい。氷魚は人群れに、目を走らせて瑪瑙を捜すが、見つからない。

『迷子になつたときは、動かないのが一番』というが、黙つていて

も、なにも始まらないような気がして、ならない。

短絡に考えた末、再び氷魚は、人混みに飛び込んでいった。
(動いていれば、瑪瑙に会えるかも知れない!)

同時、瑪瑙も、氷魚を捜して、走っていた。

(くつそお…俺としたことが!氷魚つ、どこだ)

「チツ！」

瑪瑙は、屋根に飛び上ると、再び走り出した。

「やだなあ…なんか、アヤシー雰囲気、こりや、引きかえ…さや
つ…」

「つと…氣をつけろっ」

「い、ごめんなさい」

角でぶつかつたのは、茶髪の男だった。年の頃は、瑪瑙と大して変わらないように見える。

内心、氷魚は『そつちこや、氣をつけやがれ!』と毒づいた。
「おこ」

行こうとした、氷魚の腕を、男は掴む。

「な、なによ…ちょっと離してよ!」

「こ」が、どこだか分かつてんだる?それとも、迷子か?「

腕を掴まれ、暴れる氷魚に、男はニヤリとした。

「つるさいわねつ、放さないと、蹴るわよ!」

「おつと、氣い強いなあ…氣の強い女は好きだぜ、大人しく、こつ
ちここ」

「やだつてば…ちょっと、こらつ」

(うんわ、息くさい!不つ細工なツラ、近づけるんじやねえよつ、
やめる、このつ)

氷魚は、必死に憤りをこらえていたが、ついに、堪忍袋の緒が、音
をたてて切れた。

「やめるつて言つてんだろがつ、このゲス野郎

「…」

氷魚の怒声と、その後に、何かを殴打する音が、路地裏に響いた。

「いたつ！氷魚…裏かつ」

「一、三軒、屋根を飛び越えてから、着地すると、瑪瑙は走る。

「氷魚　！」

「あ、瑪瑙」

「あ、じゃねえだろうが！散つ々搜したんだぞつ…大丈夫か！…？なにも、されなかつたか！…？」

瑪瑙は、氷魚の双肩に、両手をあてがう。

「見てのとおりよ、酔つぱらいに絡まれちゃつて…あんまりしつこいから、靴で殴つてやつたけどね」

氷魚が、つま先で示した先には、男が伸びている。

「こいつかつ、この！」

瑪瑙は、酔つぱらい男を蹴り上げると、吐き捨てた。

「行くぞ…」こんなとこ、長居したくもねえつ…」

「うん…」

幻夢抄録　目覚め　休息（前書き）

呪の街で、迷子になってしまった氷魚。
わあ、どうするー？

足早に歩きながら、氷魚は、瑪瑙に話しかける。

「ねえ、この衙から、瑪瑙の村までつて、どれくらいなの？」

「そうだな：この呂山から、歩いて一日だ」

「呂山、変わった名前の衙ねえ」

今、一人は、衙の大通りに立っている。氷魚は、周りを見まわしながら言った。

衙は、どちらかといふと、中華風で、去年、友人と行つた、中華街を思わせた。

「すごいのね、いろんな店が並んでる…なんか、お祭りみたい」

楽しそうに言う氷魚に、瑪瑙は、片眉を上げる。

「ん、見ていくか？」

「ほんと！？」

「ま、いつまでもそんな格好じや、過ごしにくいだろ？夜は特に」

「え？ そういうえば… そうだつた気もする、けど… もう慣れちゃつた

し、忘れてたわ」

（へえ…結構、細かいとこ、見てるんだなあ）

「ここんとこ、ずっと厳しかつたからな… 息抜きだ」

言い終えたとき、隣にいたはずの、氷魚が、どこかに消えていた。

「氷魚！？ つたく、なんか大人しいと思つたら！」

瑪瑙は、人群れを、縫うように進み、走り出した。

その頃、氷魚は、人波に、流されるまま進まされ、やつとの事で、流れから抜けたのはいいが、瑪瑙と、はぐれてしまつていた。

「マズイ… これつて、迷子つてヤツ？」

そのとおりだつた、相変わらず、人通りは激しい。氷魚は、人群れに目を走らせて、瑪瑙を捜すが、見つからない。

『迷子になつたときは、動かないのが一番』というが、黙つていて

も、何も始まらないような気が、してならない。

短絡に考えた末、再び氷魚は、人混みに飛び込んでいった。
(動いていれば、瑪瑙に会えるかもしれない!)

同時、瑪瑙も、氷魚を捜して走っていた。

(くつそお…俺としたことがつー氷魚、どこだつ)

「チツー！」

瑪瑙は、屋根に飛び上ると、再び走り出した。

「やだなあ…なんか、アヤシー雰囲気。こりゃ引きかえ…あやつ

！」

「つとー気をつける！」

「い、ごめんなさい」

角で、ぶつかつたのは、茶髪の男だった。年の頃は、瑪瑙と、大して変わらないように見えた。

内心、氷魚は『そつちこや、気をつけやがれ!』と毒づいた。

「おい」

行こうとした氷魚の腕を、男は掴む。

「なつ、なによつ…ちょっと放してよー！」

腕を掴まれ、暴れる氷魚に、男はニヤリとした。

「ここがどこだか、分かってンだろ？それとも、迷子か？」

「つるさいわねつ、放さないと、蹴るわよー！」

「おつと、氣い強いな、氣の強い女は好きだぜ、大人しく、こつちこいよ」

「やだつてばー…ちょっと…こらつ、やめろつ」

(うわ、息くさいつー不つ細工な力オ、近づけんなよ)

氷魚は、必死に憤りをこらえていたが、ついに、堪忍袋の緒が、音を立てて切れた。

「やつ…やめろつて、いつてんだろが、このゲス野郎 つー

氷魚の怒声と、その後に、何かを殴打する音が、路地裏に響いた。

「いたつ！氷魚…裏かつ」

「一、三軒、屋根を飛び越えてから着地すると、瑪瑙は走る。

「氷魚 つ！」

「あ、瑪瑙」

「あ、じゃねえだろ？がー散々捜したんだぞつ、大丈夫かー？なにも、されなかつたか！？」

瑪瑙は、氷魚の双肩に両手をあてがう。

「見てのとおりよ、酔っぱらいに絡まれちゃつて…靴で、殴つてしまつたけどね」

氷魚が、つま先で示した先には、男が伸びている。

「行くぞつ、こんなとこ、面倒じたくもねえ！」

「う…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0798a/>

幻夢抄録 目覚め 4章；休息

2010年10月19日12時16分発行